青山同窓会会報

発行所
青山同窓会
新潟市関屋下川原町二
新潟高校内
発行人　鍵冨清一郎
印刷所　オリオン印刷㈱

年頭ごあいさつ

会長　鍵冨清一郎

あけましておめでとうございます。

昨年は、皆さんの熱意のもとに一致協力、盛大に創立八十周年記念事業を成し遂げることができまして、本当に喜こんで、感謝しております。八十年の歴史の上に、さらに輝かしい歴史をつみ重ねるべく、同窓の皆さんの一層のご活躍をお祈り申し上げます。

斎藤幹事長の死を悼む

沢山　厳

新春のご挨拶を申上げなければならない時に、斎藤幹事長ご逝去の報を、同窓諸兄にお知らせしなければならないことは、まことに断腸の思いであります。

昨春新潟大学外科に入院手術、八十周年記念の重大な年だから、一日も早く快癒するよう頼むとの要請に答えて、武藤教授・小山・吉田の三君が、先輩のためにと精魂傾けて大手術に当られ、その後の経過良好で、病床にありながら、八十周年記念事業の進展に絶えず心を配られ、何回も外科病室に通い、適切な指示を受けながら準備に当って来ました。

この程の手術の結果、天寿を全うされた人達も多いので、十月の記念式典には、元気な姿に接しられるとの期待も空しく、退院後の回復が順調に行かず、名医をもってしても手の届かぬ病のため、まだ春秋盡きぬ、斎藤さんに期待される幾多の仕事を残されて、他界されたことは、ご本人の無念さぞかしと、察するだけでも、涙が込み上げて来ます。もう一年手術が早かったら、後悔の念も湧きます。

回想は紅顔の少年時代に馳せる。協会グランドで、新中対新商の野球試合が大熱戦を展開し、下級生の吾々は、海老茶にAのマークの応援旗の下、「青山」、「青山」と声を枯らして拍手、声援。ホームベースを守って、がっちり守備を固める斎藤名捕手の英姿を思い浮べて下さる方も多いことでしょう。

斎藤さんは野球を通し、文化的方面を通して後輩の面倒を親身になって世話して下さった。青山健児として、同窓の流の中に、生甲斐と喜びを感じ、同窓会のために献身された数少ない先輩として、敬愛の情を禁じ得ません。母校が焼失して校舎再建の苦難の三十年代にPTA会長として、十年近く重責を負われ、財政再建途上の県財政の下で、木造校舎案を覆して、県下初の鉄筋校舎再建に至る苦労の数々、校舎再建は小間切予算で、遅々として進まず、恵まれない教育環境にあって、沈み勝ちな生徒に、直接にまた生徒会機関紙「青陵」誌上を通して、常に激励の言葉を寄せられました。復興期成会の設立に奔走され、その中心となって永年にわたる復興事業の完成に精力を傾けられた。復興期に生れた母の会が、青山の歴史に、その話題の一頁を飾ることの出来たのも、斎藤さんの母校愛の後援があったからである。

七十周年記念以後は、青山同窓会の幹事長として、鍵冨会長を助け、総会には千名近い会員が集って、青山の心一に溶け合う盛会にまで発展して来たのも、幹事長の企画に負うところ大である。青陵校名問題、学校封鎖事件、八十周年記念事業計画、等々重大問題の度毎に、幹事長の率先盡力が、健康にも影響を与え、今日の悲しみに際会することを早めたのではないかと、後悔されてならない。八十周年記念事業の遂行に当って、困難な障害に突き当ることもあった。その壁を乗り越え、記念式典、記念事業が完遂されたのも、病床にありながらも、幹事長としての責務に燃えて、進言斡旋されたお蔭である。最も力を入れられた青山会館は素晴しい設備で開館し、連日満員で生徒に利用され、会津八一先生の歌碑と、大先輩の遺蹟を称えつゝ、永く後輩に教示を与えてゆくことでしょう。然しながら心胆を傾けられたこれらのものの完成を自身の目で直接たしかめることの出来なかったことは、どんなに心残りのことであったでしょう。母校に学ぶ後輩達が、先輩の好意に感激しつゝ、末永く貴重な記念物に感謝の意を捧げ励み、逞しく成長して行くことを思って安らかにお眠り下さい。

同窓会は保守的な集団の一つであるかも知れない。縦の連繋を緊密にして行くと共に八十年の歴史の流れの中から、若い力の台頭が、望まれる時が来たと思われる。大幹事長の跡を継いで立派に運営の中心となれる元気溢れる五十回代以降の諸兄、先輩に遠慮することなく青山同窓会発展のため、青陵健児の伝統を守って、貢献されんことを切にお願いいたします。

燦たりわれらが母校

―創立八十周年を祝う―

記念式典挙行

旧年十月十二日、母校においては、職員、生徒、父兄、同窓が体育館の一堂に会し、創立八十周年記念式典が簡素な中にも厳粛に行なわれた。

学校長式辞をはじめ、来賓各位からの、八十年の年輪の意義を考え、伝統ある母校の歴史に新たな一頁を加え、確固たる足跡を将来に伝えよ、という激励に対し、生徒代表から、先輩の意図したところを体し現在、将来の自己を見つめ力強く歩んで行きたいという挨拶があって意義深い式典を閉じた。

式典にひきつづき、式場で二林輝夫氏（65回卒、東京芸大講師、二期会々員）の独唱会がひらかれた。本校在学中のエピソードを話術たくみに披露しながらの数々の歌唱。かくもひろい体育館の隅々まで響きわたる力強い歌声、また時にはやさしく語りかけるかのようなあまい歌声の三十分。ただもう聴衆は酔いしれるのみであった。芸術の高い香りがいつまでも消えない会場から、参会者はやがて祝賀会場へと流れて行った。

祝賀会

華やかに開かる

色とりどりの風船が招くように漂う会場、新潟市体育館で、定刻午後一時にその会は始まった。同窓職員が歌う力強い応援歌の流れる会場は約四百を数える参会者で埋った。恩師斎藤　勝先生、十回卒の小柳篤二氏ははるばる東京からかけつけられた。来賓、歴代校長、同窓生、PTA会員、現職員がそれぞれに八十年の伝統をふりかえって語り合い、酌みかわし合う。恩師を囲み、旧友と肩組み合って、想い出をあらたにし、なつかしの歌声を口ずさむのであった。いつ果てるとも知れぬ宴も、やがて誰からとなく歌われた旧校歌に会場は一つとなり、鍵冨会長の八十周年を祝う万才三唱で、その華やかな幕をおろしたのである。

（田村記）

斎藤希式幹事長逝去

青山同窓会は、新年早々貴重な人材を失った。

長年にわたり本校ならびに本校同窓会の発展に尽された斎藤希式氏は、昨年ガンの牙に倒れ、手術後「奇跡的に九死に一生を得て、地獄の一丁目から引き返すことができた」（昭和四十七年度会報十五号巻頭言より引用）が、八十周年記念事業の推進役としての過労がもとで病気再発、新潟大学附属病院外科での必死の薬石の効なく、一月十四日逝去された。

斎藤氏は、

昭和二十一年から昭和二十九年まで、本校PTA会長として、本校教育向上のため実にご熱心に支援され、特に昭和二十九年本校焼失後のPTA活動の主役として、復興のため情熱を注ぎ、多大の功績を残された。

昭和三十九年、長年勤められたPTA会長の座をおりられるとすぐ青山同窓会の幹事長に就任されるよう推されていたが、同年六月突如襲った地震のため七月の総会は中止となり、翌昭和四十年一月の総会で絶大の推せんを受けて幹事長に就任された。

幹事長としての斎藤氏のお仕事は多岐にわたり、また常に新鮮な発想ですすめられた。その一つに「青山同窓会報」の発行がある。会費徴収を断行し、会の今日の盛況の基礎をつくられたのも斎藤氏であった。

斎藤氏が本校生徒に夢を托し、その実現を推進された青山会館の建設をはじめ、八十周年記念事業の数々の成果をつぶさに見られず他界されたことを思うにつけ病魔の非情さを憤らずにはいられない。ここに斎藤氏のご冥福を心から祈りあげ筆を折る。（上杉記）

青山会館開く

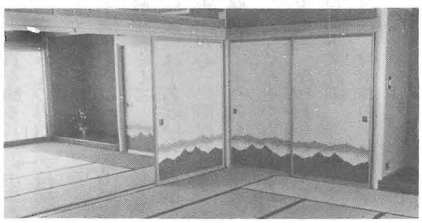
本校の伝統の古さを物語るかのようにたっていた土蔵。その土蔵跡に今は近代的な明るい感じの二階建てのビルが立っている。青山会館である。

生徒に楽しい学園生活の場を与え、職員と生徒との交流の場ともなるこの青山会館の価値は大きい。同窓会、PTA、学校側が一丸となってその実現を推進してきた同会館が完成し、昨年十一月二十九日その竣工式がはなやかに行なわれ、十二月一日から開かれた。

一階には一度に百六十名を収容する大食堂が店開き。メニューは、カツドン一五〇円、定食一三〇円、ライスカレー一一〇円、ラーメン八〇円、カケソバ五〇円、カケウドン五〇円、食べ盛りの青陵健児のこと、弁当の他にラーメンをする者、カツドンとカケソバとを組合せる者ありで、多い日には三〇〇食を越える順調なスタート。目下はメニューに「これこそは青山会館の味」といわれる目玉商品を作り出そうと工夫中。

二階は和室一間と学習室、それに進路相談室という間取り。和室は生徒のクラブコンパ、学級会、職員の娯楽、などで連日のように使われる盛況。「学習室は明るく、きれいで勉強しやすい」とこれまた評判がよく席とり合戦も盛ん。更に整備が進めば、本校の進学指導に貴重な役割を果たすことが期待される進学指導室も本校ならではの存在といえよう。学校内外の青山会館に寄せる期待は、新年を迎えて更に大きくなっているのである。

全景



和室

会津八一歌碑除幕式

（志田耕吉）

時これ昭和四七年十月十二日午前九時。県立新潟中学第七回卒業生、会津八一博士歌碑除幕の式を挙行す。碑前に会する者、新潟高等学校創立八十周年記念事業実行委員会長、同副会長、並びに同窓会、PTA役員、学校職員、生徒代表、合せて二百五十余名なり。

歌碑建立委員長石井四一郎まず立ちて建立に至るまでの経緯と艱苦の一端を述べて開式の辞とす。生徒会役員里村春江、幕前の紐を引けば、白布忽焉として剝落し、碑容粛然として聳立す。碑歌に曰く、「ふなひとは　はやこきいて　よ　ふきあれし　よひのなごりの　なほ　たかくとも」　続いて、会津記念館設立基金として鍵富実行委員長より、金一封を博士御遺族中山イツ殿に贈呈すれば、博士の墨跡「洗心」「天真」の二幅を返贈して謝意を表せられたり。さらに、鍵富委員長、鍵骨の作を刻せられたる石工藤井留吉氏、並びに歌碑の原氏を貸与せられ、かつ建立に至るまで斡旋の労を執られし渡辺秀英氏に感謝状を贈られたり。続いて菅原校長深重なる謝意を述べ、石井委員長閉式を告げて式を終わり。

顧みるに、新潟高等学校創立八十周年記念事業として、先生の歌碑建立の機熟せしは、昭和四六年なりき。爾来、委員を挙げ、議を重ぬること再三に留まらず、候補歌を各方面より徴し、これに検討を加え、遂に十二首にまで削りしは、昭和四七年三月に入りたり。

さらに一首に限るとせばいかなる方途があるべきと、委員いずれも自家の説を主張して譲らず。遂に渾斉先生の直筆にして入手しうるものというに至りて、宮中歌会始の応制歌というに極まりしは、実に昭和四七年六月の交なりしなり。石井委員長以下、委員並びに関係者、ともに努めたりというべし。

惟うに、先輩に秋艸道人あり、後輩にこれが歌碑を母校の庭前に建つる者あり、これを永く後昆に伝うるを得ば、先人後人相擁して、共に荣爾たるに庶幾からんか。

青山八十年

—80周年記念誌完成—

明治二十五年以来の本校の歴史を描く一大叙事誌ともいわれる「青山八十年」が完成した。不幸にも昭和二十九年の学校焼失により歴史を物語る資料の大半が粉失し、編集は苦労を極めたが、現旧職員（特に本校社会科教諭）、更には同窓会員の熱心な編集作業の結果、昭和四十七年十月十二日、八十周年記念式当日出版された。

八十年前の「源流」に逆のぼり、以後「天峡の峡」を下り、そして「大河滔滔」大海に注ぐが如き本校の歴史の流れを的八十頁の誌面に収めた「青山八十年」。伝統にはぐくまれ、また伝統を育ててきたわれわれ青同窓生の生きた歴史として大切に保存したい。一誌をおすすめする次第である。

同窓会々員名簿完成す

予定がおくれて、十月の記念式典に間に合いませんでしたものの、昨年末ようやく発行のはこびにこぎつけることが出来ました。

これは全く関係された皆さん、特に各期の幹事さんの熱心な御協力の賜物であります。ここに心から感謝しお礼申し上げます。

前回七十周年のときは御希望が少なく大分残部が出ました。今回は左記により頒布することになりました。会員多数のお申込みを切望します。

頒布価格　一部　五〇〇円
送料　二〇〇円
合計七〇〇円

名簿申込及代金送金方法

一、振替送金
同封の振替用紙で郵便局へ払込み下さい。

二、銀行振込
第四銀行学校町支店青山同窓会口座へ振込み下さい。

三、その他
小為替、現金、何れの方法でもよろしいです。
新潟市関屋下川原町二丁目
新潟高校内
青山同窓会宛
代金入金次第名簿を発送いたします。

尚送料必要としないものは母校事務室で現金引替で頒布しております。

君健男氏（36回）参院議員に選ばる

参議院議員松井誠氏の死去に伴い行なわれることになった参院補欠選挙で、自民党公認で立候補した君　健男氏は次点の志苫　裕氏に大差をつけて当選。副知事としての多年の着実な仕事振りと、なによりも温厚な人格とで予想どおりの楽勝を得た。中央と地方を結びつける、パイプの一方の口として参議院での今後のご活躍を期待するものである。

福田満氏（58回）初の挑戦ならず

衆院に新風を！と国際的感覚を身につけた福田氏の衆院議員への立候補を歓迎するむきも多かったが、初挑戦の弱み、確たる地盤の不足の故、無念の涙をのんだ。若さ溢れる氏の事、次回を期して着実な努力を期待したいものである。

「会津八一関係文献目録」作成にあたり

本校図書館司書　鶴巻武則

昨年三月まで私は県立図書館に勤務していました。その前庭に立っていたのが「みやこべをのがれきたればねもごろにしほうちよするふるさとのはま」という八一の歌碑です。これは普通「ふるさと歌碑」といわれていますが、この写真をとって図書館の案内書の表紙に用いたりしました。たしか今も使われているはずです。本校へ転任して半年、八十周年記念行事の一環として「ふなひとは…」の歌碑が建ち、また八一の碑と同居することになりました。参考までに申し添えますと、新潟高等学校歌碑は会津八一の碑として十五番目のものです。男の子が育たないといわれる新潟が生んだ日本的人物（新潟日報の表現を借用）そして青山同窓会の大先輩である会津八一を本校図書館としても、ほっておくわけにはいきません。碑の建立を機会に八一の著作及びその伝記・研究書等をすべて揃えたいと思いましたが、その関係図書は非常にたくさんありとても当館の貧弱な予算では買う事ができません。それならば、せめてその会津八一に関する文献目録を作成しようと調査に取りかかりました。最初は本校と県立図書館でわかる範囲内で切り上げ、ガリ版にでもしようという計画でした。ところが途中でこの話を伝え聞かれた志田耕吉先生や滝沢強一先生から印刷の費用の工面や、あまりにも不完全なものではと、八一関係の図書が多い早稲田大学へ調査に行けるよう尽力していただきました。おかげで八一に関する主要な論文はだいたい把握できたと思います。

「会津八一関係文献目録」といっても、八一自身の著作に対しては、すでに中央公論社の全集第二版十巻に長田勝彦氏による詳細な書誌があり、自と八一に対しての評論・随筆の研究文献に、重点を置いています。これとても八一自身の編による「鹿鳴集の文献」（『渾斎随筆』付録）や長島健氏編の「会津八一研究資料」（全集初版同報七・八号）により昭和三十三年九月までのものは一応まとめられています。それ以後が主な調査対象となりましたが、実際に手に取れる資料が少ないためこれら先達の仕事や、国会図書館の「雑誌記事索引」などの二次資料に依拠せざるを得なかったのが残念です。

会津八一という人は号をたくさん使った人で「八朔郎」「秋艸道人」「渾斉」などが有名ですが、そのほか「向水郎」「八千八水楼主人」「秋艸堂主人」尾崎紅葉に貰った「鉄杵」などいろいろあります。それと同じようにその活動も多方面に及んでいます。東北日報・新潟新聞の俳句選者に始まり、有恒舎・早稲田で英語を教え、東洋美術研究で博士号をとり、そのかたわら歌を読み、書を書いています。八一に関する資料を漁って感じたのですが、歌人、書家としての八一にのみ焦点をあてており美術史家としての八一にはあまり言及していません。もちろん全部がそうだとはいいません。しかし夙にその書がもてはやされ、それに伴う会津伝説なるものが流布されているのをみますと、真の会津八一像が見失われてしまうように思えてなりません。

現在作成中の文献目録はようやく一応の調を終ったばかりで活字になるのはまだまだ先の事ですが、文献をそのまま鵜呑にせず批判的に読む事もまた大切だと思います。

目標まであと1歩

新潟高校八十周年記念

募金状況中間報告

昭和47年12月31日現在

各期幹事のご苦労により現在までに下記のような募金状況であります。幹事諸兄のご協力には心から感謝申し上げます。
志がありながら未だご応募されてない方は、3月末までお待ちいたしておりますのでよろしくおねがいいたします。

期別	目標額	入金額	期別	目標額	入金額	期別	目標額	入金額
1～27	10万	217,000円	45	25万	193,000円	65	20万	112,000円
28	5万	145,000円	46	25万	210,000円	66	15万	106,000円
29	5万	75,000円	47	25万	46,000円	67	15万	57,500円
30	10万	143,000円	48	25万	276,500円	68	15万	101,000円
31	10万	114,000円	49	25万	273,000円	69	15万	150,000円
32	10万	179,000円	50	25万	333,000円	70	15万	3,000円
33	10万	160,000円	51	25万	277,000円	71	10万	43,000円
34	15万	186,000円	52	25万	309,000円	72	10万	106,000円
35	15万	221,000円	53	25万	133,000円	73	10万	18,000円
36	15万	249,500円	54 55	25万	245,000円	74	10万	5,000円
37	15万	189,000円	56 57	20万	135,000円	75	10万	2,000円
38	20万	288,500円	58	20万	209,000円	76～80	10万	4,000円
39	20万	268,000円	59	20万	214,000円	通信		86,800円
40	20万	206,000円	60	20万	122,000円			
41	20万	168,000円	61	20万	96,000円			
42	20万	268,000円	62	20万	39,000円			
43	20万	144,000円	63	20万	169,000円			
44	20万	146,000円	64	20万	6,500円	計	825	7,447,300円

八十年の回想（その一）

10回　小柳篤二

(1)　校長湯原元一先生　三代目の校長として明治三十一年八月私が一年生の時、宮崎中学校長から転任して来られた。着任早々生徒を雨天体操場に集めて「この学校は大変乱れているそうだから、私が改革するために来たのである。これから学業も規律もうんと厳重にするからそのつもりで……」と言われた時には満場しんとしてしまった。その後着々改革が行われたが翌年五月新設された県視学官に昇任され、新潟県に在任七、八年に及び県下の教育を一新された。それから北海道視学官、東京音楽学校長、東京女高師校長を歴任され、大正十年創設された本邦唯一の官立七年制東京高等学校長となり好評嘖々たるものがあった。

私は先生に呼ばれてドイツ語主任教授となり昭和二十五年まで勤続した。この学校は天下の秀才が集まり清水幾太郎、宮城音弥、糸川英夫、南博、家永三郎、日高六郎などが出ている。

(2)　教頭　入見泰三郎先生　私は代数と三角を教えて頂いたが、その名講義に敬服した。

明治四十五年、私が初めて教師になり東京一中（今の日比谷高校）に就任した時、先生は首席教諭で何かと指導に預った。

(3)　五回桜井政隆　帝大でドイツ文学を専攻し最優等で卒業して恩賜の銀時計を授与された。天壇と号し文芸評論家として帝国文学を創刊し、早稲田文学と対抗した。後、名古屋の八高教授となり令名があった。

私は新潟でも東京でもよく遊びに行き、ゲーテやシラーの話を聞いたり、ドイツ語の詩を教えられたりしたのが、ドイツ語の教師になる遠因となった。

(4)　六回　建川美次「敵中横断三百里」で余りにも有名であり、満州事変や国際連盟脱退なども同氏が事実上の推進者だった。

私の野球の師匠で軍籍に入ってからも始終文通があった。例の決死的偵察の直後、陣中から五六尺もある達筆の手紙を寄せられた時は、その余裕綽々たるに驚いた。

(5)　九回　青木得三　四年の時高知中学から転校して来たが、その学才と雄弁は抜群であった。中学時代から将来外交官になると言っていたが、大学で財政学に興味を持ち大蔵省に入った。然し主税局長で退官したのは惜しかった。

野球は自分ではやらないが大変好きなので、私かキャプテンの時マネージャーになって貰った。一高でもマネージャーをやり私の入学を待っていたが、病気のため選手にはならなかった。

思い出の一つ

学徒動員中の地震

教諭　阿部　正

昭和十九年、戦局も次第に悪化し、二月になると「決戦非常措置要綱」が決定され、三月にはこの要項に基づいて「学徒動員実施要項」が定められた。これによって工場で学生服の動員学徒が見られるようになったきた。八月十日わが校も上級生の四、五年約二百五十名が名古屋の愛知航空に第一次部隊として、駅頭での感激的な壮行会の後、東京経由名古屋に向った。翌日動員先の宝神寮に到着、十二日錬成開始、作業衣、靴等の配給、十五日動員受入式挙行、十七日職場配置、航空機の生産に励んだ。

十二月七日になると明日、八日の大詔奉戴日を期して、敵機約百機名古屋を空襲するとの情報が入り、工場に行った一部の生徒は作られた飛行機を空襲の被害から避けるため待避作業を行っていた。私は当日寮の居残り当番で畳の教室で事務を執っていた。ところが午後一時三十六分二〇秒、棚にあげてあった砂入れの素焼の消火弾や書類が急に一度に落ち散乱、寮はガタピシとゆれ動き、雨戸ははずれ倒れる。机に向っていた私の体は机と共に倒れそうになった。最初爆撃かなと思ったが地震と気付き外に飛び降りて裸足のまま、逃げ出した。隣りの寮の間を走り出したが余りにもひどい地震、生れて初めて体験する大地震で体があちこちにゆれてなかなか進まない。はうようにして行くと、そこに直径三メートルもある防火用水が満々と水を湛えてあった。その水がこのひどい地震で大きくゆれ動き、へりに当って高波を起し水柱をあげて外に飛び散っている。水だらけでつる〳〵すべる中を抜け出してこれで安全だなと思った途端またグラッとやってきた。寮の前には便所があったが、便つぼにたまったものが、これまた防火用水と同様あたり一面にこぼれ出て異様な臭がする。そんな所も通って漸く広場に逃げ出した。隣りの寮の先生方も我々の所に避難して来られた。ふり返ると自分達の寮は大きくゆれている。遂に隣りの寮は大きくゆれたと思った瞬間、砂塵をあげながら大きな音をたて、倒壊してしまったのである。全くこの世の終りと思う位ひどい出来事であった。この間、ほんの一瞬であったと思うが私にとっては非常に長く感じた。無我夢中で逃げるのが精一ぱいであった。漸く気をとり戻して寮を見廻ることにした。余震も頻発、入ることができない。外からあちこち廻ってみると一人の生徒が廊下に立ちすくんでいる。大声で呼びよせ退避している生徒と共に無事を喜びあった。空を見あげるとB29が飛行機雲を残しながら澄みきった青空の中を数機ずつ豆粒のような大きさで銀色の機体を光らせて南へ飛び去って行った。

次第に地震も落付いてきたようで、寮の二階に上ってみた。ベニア板がはがれ、戸が倒れ、ガラスがこわれ散乱している。棚の上のものは総て下に落ちている。細長い寮も曲っている。教官室のある方は傾斜がひどくとても生徒を収容することができない。そうかといって別な収容場所があるわけでもない。全く途方にくれてしまった。作業不能になった工場の各職場から一部帰ってきた。いよいよ今夜の寝場所の問題を早急にきめなければならない。一度に入れると倒れる危険もあるので室長、小隊長を集め、諸注意の上十数名ずつ交替で入れ、危険で住めない前三分の一の者は皆住める部屋へ宿替えさせた。こんなことをしているうちに先生方も帰寮されホッとした。バラック建てのこの寮に水道も断水、電気もない原始生活が何日も続くのであった。ひげは伸びほうだい、洗面、洗濯、風呂は思いもよらない。食事は工場の被害を受けなかった僅かばかりの施設を利用して風呂の水で作られたにぎり飯にイナゴ五、六匹のおかず、カタパン二人で一袋の配給、不満をいう者もいたが、お互に耐乏生活を分けあった。

その晩は余震も微弱となって、まあこれで一安心ということで身辺の整理をして寝についたのであった。夜の十二時頃疲れ果て、ぐっすり寝静まった時再度ユッサユッサと大きな地震がやってきた。自分達は最も危険なところに寝ているので一斉に飛び起きて外に飛び出す。私が一番入口近くに寝ていたので「地震だ。」と飛び起きると暗やみの中を手さぐりで他の先生方も私の後に連って逃げ出すというわけである。こんな事が毎日のように続いた。空襲も何回かあり十八日にはB29が大挙来襲三菱工場が爆破されてしまった。今でも沢山、宮部先生と会い当時の事を話しあうと懐しさで一ぱいになり大笑いすることもある。

やがて電燈もつき、傾斜している方には電柱のような丸太が数本支え棒としてつけられ、もとの部屋割に復帰した。皆ぐっすりと寝入ったところがにくらしきかな、また夜十二時頃になるとぐらっとやってきた。皆一斉に飛び起き例の調子で逃げ出した。二階の生徒も逃げ出してきた。何とかおさまり元へ戻ったが、某君だけは一階に寝ていたと感違いして二階から何時もの調子で外へ飛び出してしまったのであった。彼は腰の辺を痛め入院さわぎをしたが今はどうしているだろうか。ある日曜に寮に残っている者で植木などあげる出窓に腰をおろして、ハーモニカを吹いてはしゃいでいるうち二人ばかりの者が出窓がこわれ、それと一緒に二階から落ちたが悪運強く全く無事だったこともある。

地震も落付いた頃の日曜日に三十分程行った以前からある商店街に行って見ると、両側の家が皆腰が折れ一部の通りが完全に壊滅していた。地震は局地的ではあったが港湾地域の埋立地で軟弱地盤であった関係と、建築物の貧弱さからで特にひどかったのだと思う。新潟に帰ってきて新聞記事を見ると「名古屋地方に地震」とほんの三行位の記事しかのっていなかった。戦争中のこと故国民の志気に影響するという配慮であったか。新潟地震も大きかったが名古屋の地震も忘れることのできない思い出の一つである。

その他動員中の食堂事件、長岡、石井精密への動員、港湾荷役など数々の得難い体験をし、その勤労生活は総て水泡に帰したが、当時の事を思い出すと髣髴としてよみがえってくるのである。（執筆に当り中央高校の村島滋先生にお世話になった。厚くお礼申しあげます。）

米国瞥見

山岸達郎
（本校英語科教諭）

私は昭和四十七年夏、正確には七月二十五日から九月二十四日迄、国際教育交換協議会の「米国に於ける英語研修」に参加した。米国での主な訪問地は、ニューヨーク・ワシントン・ペンシルヴァニア・シカゴ・アイオワ・ミネソタ・イリノイ・サウスダコタ・ワイオミング・ユタ・サンフランシスコ、そしてカナダのナイアガラ瀑布であるが、このうち、ペンシルヴァニアの州立大学では四週間の特別講座その他の行事に参加、ミネソタでは、二週間の家庭滞在と小、中、高校訪問と言うスケジュールが含まれており、そこで生活したと言うことは、良い想い出であった。

一、神経質なアメリカ人

ペンシルヴァニア大学で劇の講義を受けていた時、講師のデュケー氏が、「プリントを裏表刷ってあるのは、紙を節約する為で、パルプの消費を少なくすればそれ丈公害を防げるからだ。」と言ったのが印象に残っている。

ミネアポリス郊外のイダイナと言う高級住宅地区で家庭滞在した時、夫人のゴットヒルフさんが時々布のナプキンを使っていたが、「毎食洗はねばならぬ手間はかゝるが、使い捨ての紙ナプキンを使うよりは自然保存に良いのだ。」と言う。広大な国土で自然は日本と較べものにならぬ位、不断に存るが、少なくとも知識階層の人々は共通の生活感覚を身につけていると思う。

生活は便利で、すべて機械文明を駆使し、その中に浸っている感じの生活だが、自然を求め、文明を呪うやうな言動が時々見られる。出来るならもっと空気の良い所に住みたいのだ。出歩く時は、どんな近距離でも車だが、広いので、排気ガスなど気にならぬ位なのに。

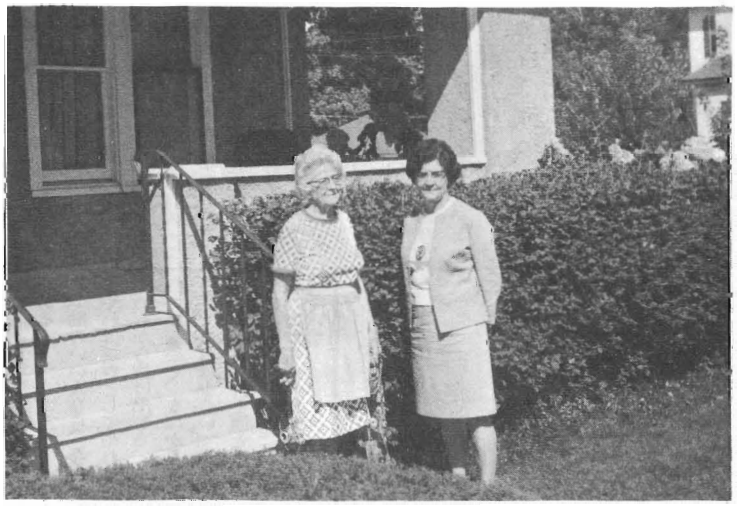
喫煙と飲酒は一部を除いては、私の会った人々では極めて少ない。私が煙草を吸うことを詰る向きが、ペンシルヴァニアでもミネソタでも時々あった。日本人はひどく煙草を吸うものと思っているらしい。ミネソタのゴットヒルフ氏は、アルコール、煙草をやらず、二週間の滞在中、煙草は私の部屋で吸うことを許されたが、夫人が用があって部屋に入ってくると、煙草の匂いがすると言って、窓を開ける始末であり、アルコールはついぞ口にすることなく、私の人生での特筆すべき出来事となった。飲みに行くにも遠すぎて断念せざるを得なかったのである。

そのゴットヒルフ氏だが、スポーツ万能の技師だが、ユールブリナー流の頭をして、頑丈な体軀だが、秋の刈入れ時には、アレルギーになるのだそうで、四六時中、クスンクスンと鼻をかんでいた。日本では聞いた事が無い。

二、親切なアメリカ人

私が付き会った限り、アメリカ人は底抜けと思える程明るく、又卒直で親切だ。九月八日の事だ。家庭滞在中、午後から思い掛けず体が空く事になったので久し振りに、ミネアポリスへ出掛けてみることにした。シーグフリードと言う高校二年の息子が途中迄車で送ってくれた。ふと美術館があることを思い出して行ってみようと思う。らしき建物を見つけたが、保険会社。丁度そこから出て来た紳士に尋ねた。その建物を美術館と見間違うのは道理で、他にもそう思う人があるそうだ。日本人の設計なのだそうだ。地理を聞いた後歩き出すと、自分の車はそちらへ行くが乗らないかと言うので、二つ返事。感謝。

夕刻、館を出て、シーグフリードに予め聞いていた場所と違う所だったが、試してみたくてバスに乗る。群集の中の孤独ということはあるが、私の場合、異国での開放というべきだった。ルートがまるで違う事は分ったが、運転手の英語はまるでつかめぬ。案内するから十セント入れろと言う。客は私一人。どうなることか、運試しと座り込む。市内を巡り客を乗せ、終点らしき所へ来た。町の全く反対側に出てしまった。ついて来いと言う。近くのバスの運転手に話をし、切符はそのまゝで乗れと言う。今度の運転手は明瞭な発音で、聞き取れる。日本人だと分ると色々話が出る。アメリカはどうかと聞くので、ペンシルヴァニアやミネソタは気候もいいし、人間も親切だと答えると、世界中どこでも人間は親切だよと言う。その通りだ。一本参った。例の保険会社の近くのバス停で降ろし、こゝで待ってろよと言う。感謝して降りると、振り返りながら走り去った。



デフナーさん近影

失敗もいゝものだ。人間に会えるのが実に楽しい。

三、デフナー夫人との再会

昭和四十七年春迄、七年間にわたって、新潟高等学校英語科に講師として勤務された夫人に会うということも私の旅行の一つの目的であった。ミネソタの主都のミネアポリスの郊外にて家庭滞在中、九月七日、私が配属されていた小学校から夫人へ連絡を取ろうとイリノイ州の交換を呼べども夫人の電話番号が見当らぬとのことで諦めねばならないかと思いはじめた。住所を頼りに何とかなるだろうと気軽に考えていたのが禍のもとであった。

この日重い気分で帰宅、夕食の時ホステスのGotthilf夫人に話をした。私としては、無駄になっても、九日（土）の週末にイリノイに飛んで、住所を頼りに探す決心であった。Gotthilf夫人は、night letter（電報のことだと後で分った）で連絡を取り、飛行機の予約一切を電話でてきぱきとやってくれた。night letterが戻って来なければ何とかなるとの事であった。

九月九日、朝六時に隣室の夫人が、起こしてくれてミネアポリス空港へ夫人の車で向う。空気がピリッと頬を打ち、少々不安と緊張が入りまじって身が引き締る。Ozark航空の小型ジェット機は軽々と離陸。客はまばら。久し振りの飛行機は眺めが快適。

うまくDeffner夫人に会へるかどうかは全く見当のつかぬ気持だったが、着いてから動きまはる丈さと思い、気楽に景色を眺めたり、機内食を食べたり。一時間十五分でIllinoisのMoline空港に到着。真先に降りたが、どっちへ歩けば良いか分らぬ。らしき方へ歩いて行くとちらと人影。Deffner夫人だ。走って、手を握り肩をだく。感激だ。Gotthilf夫人の手配が実に見事だった事に気がつき感謝。

Deffner夫人の母親も来ており、その老婦人の運転にて自宅へ。車に乗り込む時、Deffner夫人は「老人の運転に信頼して、身を任せられるか」と言う。「母の方が運転が上手い」のだそうだ。二十分程で、静かな住宅街。車中、次々と言葉が出て来る。六ヶ月目、海を隔てた国での再会なのだ。感情が溢れて、それが言葉となる。自宅前にて、"Welcome to our 1700."と言はれる。1700は家屋の番号だ。夫人は母親と二人暮し。彼女が生まれ育った家だと言う丈あって、なかなか古い。

話題は新潟の事、英語科の事。新潟を第二の故郷と感じているのだそうだ。日本と韓国への訪問を考へているのだが、親類の者達が渋っているとの事。Deffner夫人に会った事で私の米国旅行は、あと二週間を残して、終ったも同然だと言うと、夫人が涙を浮かべる。

午後から夫人の親類の方々に会い、ミシシッピ河を充分に眺め、インデアンの記念館を見学した。マークトエーンの活躍したミシシッピ河は想像より濁っており、少々失望したが、じっと河面を眺めていると、トムソーヤーや、ハックルベリーの腕白坊主達の姿が、重って浮かんで来た。

日帰りのつもりで、訪問したのだが、婦人の希望で一泊した。私に割当てられた二階の寝室は、日本から持ち帰った花模様の布団が掛けてあった。

夫人が新潟へもう一度訪れる日が待たれる。

天空の窓

濁川小学校勤務　58回　斎藤俊一

サマーセット・モーム(William Somerset Maugham)によると、作家になるためには、旅をすること、読書をすること、ひたすら書くことの三つが必要だという。

旅をすることは、たしかに経験を豊かにし、視野をひろげることになる。いろいろな人間に接するし、珍しい風物にもふれる。なによりも、旅先での自分自身を知ることは重要なことのように思われる。そして、旅先での孤独は、考えあぐねているいろいろな問題を整理してくれもする。

モームの読書についての考えだが、タメになるだろうと思って努力してする読書は全く役に立たないという。面白がってする読書でなければならないと断じている。

さて、第三の〝ひたすら書く〟ということであるが、「才能があってのことである」とモームは突放す。才能がなければ努力しても無駄だからおやめなさいというわけである。しかし、才能というしろものは、はじめから自分でとび出してきてはくれない。才能をひき出すには、やはり、モームの言うとおり、書きつづけなければならないということになる。

作家になる、ならないは別にして、体をなしている作品を書き上げるには、尋常でない修練を必要とする。どうしても、文章技術が前提となるからだ。格の高い作品を生み出すためには、思想も重くそして厚くなければならない。

＊

私は、雑誌「学界」に十余の作品を投じてきているが、全く実らなかった。第一次の選もとおらないのである。

石原慎太郎の「太陽の季節」が発表になったのは、「文学界」の昭和三十年六月号であった。私は仙台の下宿で、「太陽の季節」に衝撃を受け、そして、小説の、ほんとうの面白さに目を開くことになる。

実は、その六月号は、新人賞の当選作品が発表される号であって私は心待ちにしていたのである。

(私の初の投稿作は一次の選にもれたことが、その年の五月号か四月号だかでわかっていた。)「太陽の季節」を一読した私は、その作品がホンモノであると心底から思った。それで、すぐに、六月号をまるめて紙を巻き、新潟の文学仲間に送ったのである。

石原慎太郎の才は、並みではない。たいへんな男である。石原慎太郎のあとに、「文学界」で才筆をみせた有吉佐和子もタダモノではない。たいへんな女である。

作家になるなどということは、天空の窓を開くのに似ている。

サマーセット・モームが、「才がなければおやめなさい。」と書いたのはほんとうなのである。私は三年前から、東京に作品を送るのをやめにした。

＊

今、私は、小学校の教員をしている。この間、私は少年詩の一つを新潟日報に投じたら第八回の日報詩壇賞を受けることとなった。(おとなの詩人が、子どものために書く詩を少年詩という。子どもが書く詩は児童詩である。)

少年詩だからといって、力を抜くわけではない。いつだって本気になっているのであるが、私の少年詩が、なんと、おとなの詩としても通用したのである。

私の手元には、今、少年詩が七十余編たまっている。これからも少年詩を書きつづけようと思っている。ほめられたからである。

58回　北井一郎氏

本年度の芸術祭優秀賞を受賞

＝新潟日報「時の人」より＝

ようやく髪の毛が一センチほど伸びそろった。「どうせなら、役に徹底しようと思って」。丸坊主に二カ月間たくわえたヒゲをはやして踊ったモダンバレエ「鮫」の演技が認められて優秀賞を。

踊りに食いついて二十六年。通算十四回目のリサイタルで手にした〝栄光〟を語る時、口をついて出てくる言葉は意地であり、執念であり、およそモダンバレエという言葉から受けるハイカラな印象には不釣り合いのものだった。

「常に自分は舞踊界の第一線にいたというのが、心の中で確認されたようで」。鋭いまなざしにもうひとつ、自信が加わる。

高崎生まれの新潟育ち。旧制新潟中学時代、だれにも内緒で夜、踊りの学園に通ったのが、そもそもの始まり。東京教育大の体育学部に入学と同時に石井漠の門をたたく。昭和二十五年、石井漠の全盛時代である。漠先生が仲人から名付け親まで、一切合切「かわいがってくれました」。「踊りに対する不屈の闘志を教えてくれた漠先生」も今は亡い。

門弟としてよりそう立場から、師としてよりそわれる立場へ。

「今でも、けいこは大人のクラスで一緒に汗を流します。生徒に見本を示しながらやるとなると、ごまかしがきかない」。それをやらないと生徒がついてこないとも言う。かけ声だけの〝けいこ場先生〟ではない。顔の色ツヤからして。

自分の体を通して、見る人に今日的な共感を与える。言うは易くである。

「勘のいい人なら、なんでも十年やればプロとしてやれる。でもその形から抜け出して、ものの本質を見極めて、なにかを発散できる人、これは少ない」

「実際は、汗と涙と、そんなものに支えられて…」。形から抜け出すには、というのは愚問であった。

田中先生のことなど

67回　堀川楊(旧姓　下条)

私が新潟高校に入ったのは昭和三十一年だから、もう十七年も昔のことになる。二年前に校舎が焼けて、入学式をする体育館もなく、授業は木造のバラックで受けた。前の年は二部授業だったそうだが、私達の入った年に新館が一部出来てそれは免れた。バラックではあっても、土足で入れたし、掃除は簡単でよかったし、何よりもはじめて試験を受けて入学出来たという事だけで嬉しかった。陽の照る初夏や秋の昼休みには、バラックのはめ板にずらりと女生徒が背をもたせて、よく王様じゃんけんをした。女生徒は四十二人ほど居て、皆元気だった。

授業がはじまると間もなく「これは〇〇大学の昨年の入試問題だ」などという言葉が頻繁に先生の口から出るようになり、高校とは何と息のつまりそうな所だろうと思った。学年が進むにつれてその傾向は一層強まり、勉強はずいぶん辛かったけれど、十五年もたつとそういう事は大方忘れてしまった。授業が無味乾燥だったり、先生方が生徒の気持を分ってくれない等という、今もよく聞く不満がなかった訳ではなかろうが、学校から離れたところに、確かな自分達の精神的な生活の場があった。親しい友達とは始終いろんなことを議論しあった。休暇になれば朝から晩まで小説を読んだり音楽をきいたりした。親しかった人々とはその后も連絡をとりあっているが、当時その人々から受けた影響は測り知れぬほど大きく、大学へ入ってはじまった私達の青春時代の、下準備を、その人たちと共にしていたのだと思う。

私にとって高校時代の想い出は、そうした学校からはみ出した部分に多いのだが、あの天井の低いバラック校舎を懐しむ時、たった一つ、いつも想い出すのは、漢文の田中先生の事である。

入学式の数日前に、式でする挨拶のことでわざ〳〵露路裏の小さな私の家を探して来て下さったのが、先生に出会った最初であった。玄関においたみかん箱の中には、栗色のモクモクした仔犬がねていた。数日前、高校に合格したほうびに、やっと飼うことを許された捨犬だった。先生は用をすませて帰りがけにしばらくその仔犬のそばにしゃがんでなぜながら、この犬は病気ですね、と仰言った。仔犬はその日から数日ぐったりして元気がなかった。もうお名前も覚えてはない、があだ名は熊といって、ひげが濃いせいだと最初の時間に教った。小柄で少し背を丸めて歩き、いつも黒い背広を着ておられた。はじめて習う漢文だった。皆ちんぷんかんぷんな間違いをしたが、先生はいつも優しかった。ゆっくりと一人一人の間を歩きながら、かんでふくめるように漢文の手ほどきをされた。ある日の昼休みに、友達とこっそり前の山賀屋で食べて居るところをみつかった事があった。次の日廊下でお会いしたら、「ラーメン、美味かったかい」と仰言った。

その先生が、一年の夏休みがあけて出てみたら、もういらっしゃらなかった。急に関東の方へ転勤なさったとか、あとで聞いた。私

はしばらく先生が挨拶もなさらずに移られた事をいぶかしみ、心を痛めた。

こうして、何事もない想い出がいつまでも心の中に残っているのは、ともすれば情感の乏しくなりがちな日々の中で、田中先生の繊細な心と、生徒たちへの思いやりが、どんなにか有難かったのだろうと思う。もう昔のことだし、覚えておられる方も少いのだろうが、御消息がわかれば嬉しいと思う。

48年1月15日

（新大脳研究所神経内科勤務）

＝これからが人生のスタート＝

（36回同級会）

母校八十周年記念祝賀会に出席の会員から今秋の三六回は夫婦同伴で阿賀の鮭料理をという話で、十一月三日を吉日とし、直ちに市内及び近郊五〇氏に案内状を発送した。

あまりにも日がよすぎて何故こんな日を選んだのかとのお叱りを受けたり、表彰式、記念式典、孫の誕生祝、子供の結婚式、結納等の理由、はては阿賀の鮭を食って水銀中毒になるのはいやだという者もあり、阿賀浜温泉への参加者は十四名と夫人二人。

久方振りの参加者もありなごやかな中に会を閉じ次回は三条、加茂方面を約して散会した。その後参議院議員選挙に君健男君が出馬する事になり激励会を十一月二十九日上大川前六のとや旅館に於て開催、集まる者二十八名、県下をかけめぐっておった君健男君もかけつけ大いに気勢をあげた。

39回 湯沢の一夜

時はこれ昭和四十七年七月二十二日、土曜、晴天。

さすがに暑い夏の日も夕風涼しい上越は湯沢温泉、国鉄苗場荘の広間に一浴後のユカタに着替えてお膳を据えならぶは誰々ぞ

ビールに酒に往事を語る悪童ども十七名。禿頭あり、白髪あり、ゴマ塩にメガネ、痩型、肥満体、丸顔、細面、鼻ヒゲ男……。これぞ我等が青山三九会の面々である。

昭和七年、母校新潟中学を巣立ってより四十年、人生の風雪にかっての紅顔は色あせり。然しながら話し語るうちにお互のツラの皮の下からほのぐと赤線帽子の少年の面かげが浮き上ってくる。

「湯沢は東京組との出会いに便利だから……」と国鉄OBの（トラさん）皆川登良夫君にたのんでここに宿をきめたのだが東京組の参加は木村豊雄君とかっての早大剣道部の雄、清野春二君の二人だけ。やがて宴半ばに「ヤァーおそくなってネ……」とニコニコ顔で席に着いたのは阿部助哉君（社会党代議士）、公務多忙を振り切っての参加である。

談論風発、人生を語り、仕事を嘆じ、またはオカーチャンに聞かせられない体験談をヒソヒソと。孫の話しや本人自身の病苦の回顧には思わずホロリとして杯を覚く。興つきざるも旧校歌を一唱して宴を閉じ、各自の部屋へ

夜は深々と更けてゆくが廊下にひびく大いびきや、部屋からもれる牌の音は三九会の健在を示す。

翌朝はまた浴後の朝酒に元気ハツラツ

「いでや。さらば」と別れゆく我等青山三九会十八名。

当日出席者

白勢誠一、皆川竹次郎、皆川登良夫、吉田二郎、高橋栄一、池田藤三、清野春二、金内一雄、木村豊雄、佐藤一義、藤巻行也、山崎寿吉、小武内尚三、福井敏雄、高橋新一、阿部助哉、小林芳輔、福山健（福山記）

◎三九会の皆さん、今年は六月に妙高温泉で会いましょう。

54・55回 恒例新年会開く

市議　早福　卓　記

正月5日の同級会は恒例により「円応寺会館」に於て催された。

御招待の恩師は常連の沢山先生阿部先生に加え、在学中に国語と文法を教えて戴いた武田慎三郎先生に御出席を賜った。

武田先生の御挨拶によれば「一度位、女の生徒を教えて見たいと考えていたところ、折良く青陵高校に奉職して念願通りとなりました。その故か未だ恍惚の人には程遠く元気一杯であり、若き日の諸君の想い出を語り乍ら、御馳走になります。」と昔の謹厳さと打って変ったくだけたお話し振りに一同感心して聴き入った。

沢山先生阿部先生から「母校80周年事業」に対する協力の感謝と同窓会推進について格段の力添えを要請され、続いて酒宴に移った。

当日、集う者四十名。例年より十五名程少なかったのは幹事の責任かなアと反省いたしているが、四十の半ばになると飲み疲れの故もあると独り慰めてみたりしている。

ところでこれも亦4年間続いて恒例化して来たのに「蒲原神社の厄落し」がある。始めは、41才の前厄を払って貰いましょうと始ったのが、今では毎年、正月一五日蒲原様で一年間の無病息災を祈念する目的に変り、結構この会合にも20人以上集るようになった。5日に不参加した者でも15日には出席する者もいて結構同期の桜は毎年正月には50人位の面々と旧交を温め会う機会として利用している。

好漢ども、来年亦元気で来いよ?!

67回 次回は11月11日

旧ろう十二月五日、雨まじりの悪天にもめげず、駅前の「金剛」において、三十余名の参加のもとに開催された六十七回の会合も卒業後十年目に第一回を始めて、以来毎年一回不定期に集まり、第四回目を迎えた。今回は、年末に近く、選挙でさわがしく、集まり具合を心配されたが、定刻ころには三十有余名が、各地より参加し、例年の数にはなった。早速お招きの先生方よりのスピーチをいただき、近況報告やら、友人消息やらへと話がはずんだ。今年始めて、同級会に顔を出したが、今までは開会の案内を見たこともなかったぞ、などの話しもでて、できるだけ早く、正確な学年名簿を作ろうということを決めたが、残念ながら、誰達が、いつまでに、ということまでは決めそこなった。

又、会合の日も、今後は毎年、同じ時にやれるようにと、原案として、新制高校にすると十一回卒なので、十一月十一日がよいだろうという話しになった。正式決定ではないが、しばらくそれでゆくことにしようと、幹事役では相談がまとまった次第である。

宴はねるや、古町すじへ二次会の足が向ったのは、例年の通りであった。

幹事　石田瑞穂　オリオン印刷

中野　仁　菱電社　(66)－8118

永井健司　永井電気

学校沿革略史

明治25・7・1	新潟市西大畑町曹洞宗中学林を仮校舎にあて新潟県尋常中学校と称す。
26・3・12	生徒一三七名。
	関屋に本校舎新築落成。
32・2	新潟県中学校と改称。
33・4	新潟県新潟中学校と改称。
34・8	新潟県立新潟中学校と改称。
大正11・7・1	校舎改築落成式及び創立30周年記念式挙行。
昭和23・4・1	新潟県立新潟高等学校と改称。高等学校及び中学校の通信教育開設入学許可三三〇人。
27・10・12	創立60周年記念式、新校旗、新校歌制定。
29・4・4	校舎及び附属建物焼失。
	鉄筋コンクリート新校舎地鎮祭、起工式挙行。
34・3・3	通信教育課程から二名の初卒業生出す。
	新潟県立新潟高等学校通信制と改称。
36・10	新潟地震のため校舎、屋体被害を受く。
39・6・16	旧屋内体育館改造、通信制生徒宿泊施設完成。
40・10・5	特別教室棟新築起工。
45・4・10	創立80周年記念式挙行。
47・10・12	

我らが六十九回

（69回　村山郁夫）

学校出てから十余年、遂に三千才の大台に乗ってしまった我々。

六十九の英語読みが示す通り、助平族に代表される健児の団結は毎年正月二日夕方吾妻屋旅館の大広間で発揮されるのであります。

だれが幹事でもなく、案内状もなく、どこからともなく雪を踏み傘をさし、集い来る若人その数、二十五名有余、酒を汲み杯を回し互いの活躍を讃えあるいはケナし合って2時間、だれともなく立上って肩を組み大声で歌うは、なつかしき応援歌。こんな純粋な顔は見せたことのない連中が瞳を輝かせ、声を限りに歌うのであります。

やがて中学校々歌が終了すると来た時のように静かに夜の街へと消えていきます。

こんな集いが人知れず、十年も続いている我々同期会。うれしい話じゃないですか。

63回　今年はちょっと少ないな！

年令はほぼ二十六才、我々六十三回ははや各界での中堅として、多忙な日々を送る年である。そのせいか、今年は例年の盛況にもかわず、二十数名の出席のもと、一月八日、市内、田中ホテルにおいて開催された。横山、沢山の両先生のご出席のもと、お互いの近況を報告し合い、歓談した。毎年一月と八月に会をもつことになっているので、次回八月の一層の盛況を期待して、連れ立って、夜の街へと散って行った。

報告　山岳部OB会

例年のとおり、一月二日夕より、西堀八の天龍に於て、開催。二十人位集まれば、との幹事の予想を打ち破り、続々参集、定刻には三十余名となる。今年卒業したばかりの者から、卒業後二十年近い者まで、年令の差も大きい会である。互いの近況報告をのべあい酒につれ、歌も出て、なごやかであった。最近は、現役（在校生）の入部希望者がいささか少いようであるが、もっと自然の中にとびこんで、自分をきたえ、友情を求めるようになればよいが、とのOBの声であった。

来年も又一月二日には集まる予定である。

予告　61回卒

卒業以来二十周年になるので、今年は盛大なる同級会を、四～五月頃に開催すべく目下企画中です。東京からも、新潟からも参加しやすい場所でということで、ただ今広く会場をさがしております。ご期待下さい。

幹事　伊藤良介（新潟臨港開陸）(74)—五一八一番

〃　小島　汎（シルバーホテル）(45)—七一一一番

予告　二月頃開催予定　52回生

新潟市内に於て、開催すべく、只今準備中。誘い合せて、多数の参加をお待ちしています。

幹事　広川彰恩（高念寺）

〃　山崎利兵衛（県庁童産課）

〃　津野正平（市役所）

〃　高橋良雄（自営）

〃　田村与一（ザボン）

理事長に石井氏

新潟青年会議所

最近、地域社会の開発に、又会員相互の開発にと、その積極的な活動が市民に好感と注目をもって見守られている新潟青年会議所の理事長に、石井壮一氏（61回）が選任された。同氏は、父、四一郎氏（34回）のあとをうけて石井電光社の社長としても多忙なこの頃ではあるが、郷土新潟が、若者にとって希望をもって住める街になるなら労をいとわないと、このところ一層張り切っておられる。幸い前年度の理事長も同窓　新谷稔氏（62回）であり、見事なバトンタッチのもと、若き団結と行動力をもっている青年会議所が一段と発展を遂げる様、石井氏の指導力に期待したいものである。関係同窓各位の暖かい励ましとお力ぞえをお願いしたい。

（M記）

求む編集員

会報編集室

全国各地に雄飛し、それぞれ、活躍している同窓各位をつなぐべくとして、会報をいかにしたら有用たらしめんかと、日夜考えているのですが、いかにせん編集室の人数が少いということは大変です。

衆知を集めて、よりよきものを生み出す為に、新聞作りに興味のある同窓の参加を切望しております。新潟在住の方はもちろん、全国各地の方々の、地域ニュースを、同窓消息を盛り込んだ投稿による参加をお願いする次第であります。なにしろ我ら青陵健児は、その活躍たるや、全国津々浦々にわたり、母校存在の地、新潟に於て、その全消息をつかみきれません。気の向いたとき、気の向いた調子で、あなたの近況を、先輩、友人の思い出を、又、この頃考えることなど、お送り下さるようお待ちしております。文芸もよろしいですね。一篇の長さを千二百字位までにお願いいたします。もちろん稿料などは差し上げませんので税金に追われることもなかろうかと存じます。次回の発行に向けての多数のご寄稿を本当に楽しみにしております。

（M記）

編集後記

▲斉藤幹事長逝去の悲報で明けた新年。鋭い感覚の持主でおられた斉藤氏の巻頭言、あの名文をもはや読めなくなったことがなんとしてもさびしい。

▲あまりにも突然な斉藤幹事長の逝去にとまどったが、沢山巌氏に斉藤幹事長への追悼文をいただき巻頭言にかえさせていただいた。

▲次回17号で、斉藤前幹事長の追悼の記事を特集し、深く御冥福を祈りたいと考えております。

▲本校八十周年記念行事、事業もとどこおりなく終り、本会報も15、16号の二回にわたり特集記事を載せ、その経過と成果を御報告することができ心からよろこんでおります。不充分な点が多かったとは思いますが、御一読いただきましたこと厚く御礼申し上げます。

▲次号から、「身辺雑話」とでも題して、会員諸氏の随筆なり、生活体験なりを紹介させていただきたいと思います。また、「会員消息欄」を設け、会員の移動、業績なりを紹介したいと考えております。御遠慮なく各種の原稿を事務局宛お送り下さるようお待ちいたしております。

（校内幹事60回上杉雅之）

昭和46年青山同窓会収支決算書　自 昭和46年4月1日　至 昭和47年3月31日

収入の部

科目		決算額	備考
繰越金		48,433	前年度繰越金
入会金		157,600	全日制生徒　1人100円×1,363人＝136,300円 通信制卒業生　1人300円×　71人＝21,300円
会費		1,101,700	
	新卒業生会費	262,200	全日制生徒1・2年生1人200円×904人＝180,800円 3年生1人100円×459人＝45,900円 通信制卒業生　1人500円×　71人＝35,500円
	会費	839,500	同窓生　1口500円　1,679口分
雑収入		6,341	預金利子
合計		1,314,074	

支出の部

科目		決算額	備考
総務費		606,511	
	人件費	339,100	職員1人給料手当
	通信費	138,865	会報発送・総会・役員会・新年会案内葉書料 振替料振込料
	印刷費	37,400	封筒・振替用紙・案内状印刷代
	慶弔費	31,500	退職・転出職員餞別・弔事見舞・会員香典料
	退職手当積立金	50,000	
	雑費	9,646	諸雑費
事業費		488,608	
	会報印刷費	237,380	年2回発行会報印刷代　1回3,500部
	会議費	97,028	総会・役員会・会議費・クラス会寄贈酒料 支部総会出席会費
	卒業生記念品代	107,600	卒業生におくるバッヂ・湯のみ代
	青陵祭補助	11,000	青陵祭ポスター印刷代
	通信制青山同窓会補助	35,600	通信制同窓会会費納入者1人につき200円178人分
予備費		0	
合計		1,095,119	

収支差引残高　218,955円　内訳 100,000円 基金積立 / 118,955円 次年度繰越

上記の通り相違ないことを確認する

昭和47年5月31日

監事　福山　健

監事　沢山　巌

昭和47年度青山同窓会収支予算書（案）　自 昭和47年4月1日 至 昭和48年3月31日

収入の部

科目		本年度予算額	備考
繰越金		118,955	前年度繰越金
入会金		149,000	全日制生徒1人100円×1,340人＝134,000円 通信制卒業生1人300円×　50人＝15,000円
会費		998,000	
	新卒業生会費	248,000	全日制生徒1・2年生1人200円×890人＝178,000円 3年生1人100円×450人＝45,000円 通信制卒業生　1人500円×　50人＝25,000円
	会費	750,000	同窓生　1口　500円　1,500口分
雑収入		2,000	預金利子
合計		1,267,955	

支出の部

科目		本年度予算額	備考
総務費		680,955	
	人件費	370,000	職員1人給料手当
	通信費	160,000	会報発送・総会・役員会・新年会案内葉書料 振替料振込料
	印刷費	50,000	封筒・振替用紙・案内状等印刷代
	慶弔費	30,000	会員慶弔電報料・香華料・離任職員餞別
	退職手当積立金	50,000	
	雑費	20,955	諸雑費
事業費		567,000	
	会報印刷費	250,000	年2回発行会報印刷代
	会議費	150,000	総会・新年会・役員会・会議費・クラス会寄贈酒料 東京総会・支部総会出席会費並旅費
	卒業生記念品代	120,000	卒業生に贈るバッヂ・湯のみ代
	青陵祭補助	12,000	
	通信制青山同窓会補助	35,000	
予備費		20,000	
合計		1,267,955	

収支差引残高 0 L

昭和47年度青山同窓会費納入者

会報への記載をもって領収証発行にかえさせていただきます。　（4月～12月までに納入済のもの）

本年度分未納の方は3月までに納入下さるようお願い申し上げます。
この分については次回会報に掲載いたします。

期別	氏名
10	小柳篤二
13	斎藤義臣
14	高橋一郎
16	倉島正平
	羽下修三
19	鍵富清一郎
	阿部礼一
20	小嶋源吾
21	鹿野愈
	水沢嘉一郎
	吉田武四郎
	山口吉次郎
	若杉吉五郎
22	佐藤長作
23	伊積政雄
	佐藤俊次
	西山辰蔵
24	青山松一郎
	真保吾一
	星野晃広
	長野善三
	上原堅次
26	木村耐七
	桑原自弼
	苅部信吉
	斎藤三郎
	佳木諭介
	永井信次
	根布義雄
	原隆太郎
27	古山利雄
	斎藤澄丸
	佐藤卯三郎
	田中市助
	田中英一
	八田健次
	真壁喜三郎
	三田弘
	大谷鐘吾
	唐津英作
	小林十一郎
	土田真也
	千野完吾
	塚田武雄
	坂井義衛
	薄田正知
	広橋敏藤
	村田凡
	西枝一江
	野村治三朗
	本間敏男
	松浦茂路
	松田安懐
	永野鉉三
	山崎安平
29	石崎重郎
	朝倉良治
	伊藤洵
	北村太市
	田村文三郎
	松井達夫
	武藤経世
	山崎徳左
	渡辺好雄
30	伊藤定策
	岩瀬富士雄
	阿部七治
	遠藤種雄
	上原勝次
	片桐義礼

期別	氏名
30	高橋松蔵
	木村逸郎
	湊元克己
	中居直二
	西山義雄
	南宏
	山添直
	山宮英二
	鷲尾徳雄
	渡辺五郎
	渡辺浩太郎
	浅海勝治
	斎藤一男
	佐藤静午
	建部一
	堤交平
	金井五郎
	佐藤吉次郎
	中山文吾
	名倉清
	二木松雄
	本多深応
	松井道夫
	村田忠夫
	守口東平
	山下大蔵
	渡辺政吉
	味方正造
	浅岡博
	笠原直三
	笠原六郎
	北村博繁
	解良順治
	清水七治
	庭山政次
	長谷川政二
	小林力三
	渋川周蔵
	霜鳥重策
	菅原憲雄
	竹林松二
	高橋恭平
	塚野忠三
	常山四郎
	星野忠五郎
	本間忠孝
	三間博
	吉川直志
	樋口昇
	安部洋一
33	植木実就
	明間俊策
	川上英三
	川村欽治
	小林泉
	星順司
	平石恒夫
	高橋真二
	長場末男
	二木茂松
	春木五郎
	広本克己
	佐野賢一郎
	佐々木勧
	清水弥寿雄
	高橋又治
	西垣二郎
	広瀬広
	福山忠司

期別	氏名
33	堀川秀一
	松浦錦一
	山添三郎
	若林清
	山田又一
34	石井四一郎
	今井一雄
	上原廉三
	小野塚忠義
	尾崎貞夫
	北村治作
	北村秀以
	清野力
	木村元
	林啓介
	真部義雄
	柏森忠四郎
	神田坤六
	佐藤彰治
	関川信丸
	相馬貞蔵
	高見庄吉
	塚田大願
	長浜浪治
	堀保利
	本田弥太郎
	山崎重三郎
	山本剛男
	吉田英一
	渡辺芳雄
35	浅野豊
	五十嵐久四郎
	石本謙三
	今成一郎
	石本省好
	大島正
	大西正三
	岡十兵衛
	篭島秀雄
	近藤百之治
	斎藤昌市
	鈴木嘉男
	寺田利治
	古川喜久治
	小柳胖
	亀谷繁
	熊倉雄三
	沢山巌
	須藤良明
	相馬雄三
	丹路信治
	野水信一
	山名栄吉
	小出藤治
	相沢敬英
36	青柳英三
	青山勇助
	太田万雄
	岡田信夫
	相田和夫
	石橋健男
	磯野洋
	今井二雄
	宇佐美博
	加賀田二四夫
	加山春雄
	金井宣夫
	加藤正弘
	河辺昌伍

期別	氏名
36	久保田昌二郎
	久保文苗
	倉田亨
	斎藤英四郎
	杉本磐根
	関根勤
	西藤司郎
	田中武
	寺井元一
	針貝信吉
	伴修
	樋口均
	福田謙也
	藤田九三郎
	丸岡寛
	渡辺尚敏
	宮尾正雄
	村山信雄
	吉川恒吉
	渡辺徹
	村山浩
37	伊藤正春
	阿部広雄
	鍵慶吉
	高橋正敏
	猪俣政義
	榎並季平
	遠藤稔
	大笠西正
	笠原吉一三
	桜井悌二
	鈴木正二
	田中正二
	田二巻恒彦
	富木哲男
	野永良一
	野末武夫
	樋口次郎
37	村木門吉
	若林忠蔵
38	味方正作
	安達奪吾
	石黒得一
	太田武
	大小沼正
	小沢信一夫
	河上由男
	小柳誠
	神田利武
	桶谷勇策
	後藤林八
	佐藤謙介
	近藤円
	笹川仁一郎
	重野伊
	白井正夫
	田中松一
	田巻二郎
	等々力英男
	成田繁二
	田村勇作
	藤宮武
	舟崎徹
	真柄一衛
	三浦良介
	宮尾益夫
	星野茂
	細野哲雄
	山口五郎久長

期別	氏名
38	山田重平
	山田正夫
	吉田正男
	吉田昭平
	渡辺義平
	阿部尚道
39	岡田正雄
	川崎孝治
	北川立夫
	小林芳輔
	味方恭一
	荒川正
	阿部助哉
	今井正雄
	猪初男
	小武内尚三
	斎藤喬
	高橋栄一
	桝山延次
	皆川竹次郎
	宮原正次
	涌井十一郎
	白勢誠一
	新田義正
	藤木得司
	福山健
	松川男児
	前田貞正
	皆川登良夫
	村田篤
	山崎寿吉
	吉田二郎
	若松栄一
40	浅妻直末
	阿部富衛
	安倍大祐
	犬井大剛
	井村繁樹
	倉田浩吉
	小島松一
	阿部芳男
	池田政男
	小沢太郎
	熊倉武夫
	小林孝三郎
	近藤敬治郎
	渋川七夫
	鈴木保穂
	関種吉
	竹林正五郎
44	南学正時
	平田甚
	渡辺信雄
	広瀬正威
	古山淳三
	本間井章
	松井寛治
	松田一郎
	湯浅市作
	吉岡武憲
	井上栄一
	金子清
	木村新
	志賀潔
	白井哲夫
	茂野重蔵
	鈴木平八郎
	高島蒔
	高橋正道

期別	氏名
	南部弥之助
	深沢忠一
	丹羽正樹
	番馬三作
	布施栄信
	本間敏雄
	丸潟馨
	八木勝
	山谷修一
	渡部富義
	渡辺忠雄
	今川正男
	今成隼次
42	石山武
	大野総一郎
	阿部貞一
	今井包和
	今泉景喜
	薄田開元
	加藤悦平
	神林駒年
	金沢裕
	重田学
	鈴木一男
	玉木深根
	前田政二
	丸山平次
	青木一夫
	浅平彰美
	今井亮
	市橋敏雄
	岩永護
	内山巌
	大竹尚吉
	小沢省三
	鍵富馨
	加藤行輝
	倉田久介
	近藤種臣
	佐藤和吉
	笹川謙録
	佐藤彰平
	佐藤貞之助
	鈴木英夫
	早川昌陽
	浜田春栄
	早船洋
	樋口武
	田中功
	丸山直威
	岩谷燕一
	小田正衛
	小原康作
	大西市郎
	塩原高志
	金子一夫
	北沢裕
	小池寿哉
	小林広安
	佐々木勧麓
	如沢与次郎
	清水俊郎
	錦織登美夫
	山根俊英
	田辺啓三
	田中勝治
	谷沢肇
	田宮芳夫
	手島聡

期名	氏名
	中野彪
	西山尚三
	本間栄次
	藤原俊雄
	石崎政治
	金沢徳太郎
	川上喜八郎
	五十嵐与四郎
	扇嘉家
	柏崎賢太郎
	小島平弥
	小林直弥
	谷口弘
	橋本良材
	矢部更
	木村佑治
	小山尚一
	清水賢栄
	白倉丘
	関崎睦男
	高野一
	高橋光雄
	高山照三
	等々力迪男
	野島義雄
	長谷川健次郎
	福田賢弥
	藤宮松太郎
	星寛二
	綿井兵衛
	沖野準
	長谷川渙
	坂井達男
46	江口松弘
	大越健治郎
	加茂井三郎
	小林信夫
	小林誠一
	川上慎三
	熊谷大輔
	栗原道樹
	小山崇熙
	高野喜夫
	谷欽也
	茅原一也
	高橋是成
	土屋松公
	永井達吉
	新田公淳
	広神良彦
	本田富雄
	湊栄一
	横山隆二
	米原進
	若井欣一郎
	冨橋敬吉
	小林兼吉
47	朝日翠
	安藤誠也
	飯沼竜一
	池田謙三
	内山青郎
	木村和郎
	斎藤久
	藤田三之助
	上田政雄
	風間勲
	倉井整
	剣持栄一
	斎藤浩一

期別	氏名	期別	氏名	期別	氏名	期別	氏名	期別	氏名	期別	氏名	期別	氏名
47	斎藤暲太郎		五十嵐喜八郎		渡辺竜馬		曽我浩		伊南純雄		両川政道		
	清水善夫		瀬谷誠		山崎利兵衛		近哲男		和泉修治		敦井栄一		
	巣山雄二郎		高橋忠行		湯木昭二朗		高橋昭吾		泉均		皆川泰次郎		
	鳥居俊夫		根本洋一		渡辺亘		藤崎茂		薄田聡		村山郁夫		
	西芳郎		渡辺稔	53	飯野俊栄		松井徹郎		江口律子	70	能田直子		
	真壁秀二		渡辺進		遠藤茂		諸橋新		小野塚淳一		鎌田瑞枝		
	丸山銕治		土屋信義		大滝侃市		行田宏		佐藤正明		新田誠一		
	森田美寛		西村明忠		大倉憲吾		早川哲夫		小林洋一		藤井朝子		
	若杉正		前川懋		久代和夫		平山詩郎		白倉至	71	菅原宗人		
48	秋元俊明		山作栄司		小林辰雄		福島惣吉		相墨直彦		井上恵		
	遠藤真		馬場賢一		一柳邦男		福田満		滝沢一彦		菅井正		
	大塚進弥		堀信誠		神林輝弘		本間庄二		滝沢正元		鈴木孝一		
	大野三樹		岡田務		笹川徳義		丸山幸男		戸井田一美		中村英一		
	小川清常		丸山勉		桜井智		宮崎近励		長谷川正		成田常己		
	檀木基		山田瑋治		広川勇		矢野教		横田美昭	72	立川克雄		
	風間善雄		赤井貞彦		篠原長一		青柳広士		渡辺昌夫		堀一		
	櫛純一		歌川正博		田中治英		坂井熙一		村田正		熊木高志		
	小池清泰		永木昭治		桝潟昭夫	59	安食裕夫		山崎忠昭	73	皆川和夫		
	近藤源資		大関雄策		真柄芳昭		安倍邦造		渡辺憲一	74	近藤博		
	坂井光信		小黒昭六郎		高山義一郎		飯塚実		和田和男		奥寺淳子		
	諏訪宏		落合毅	54	浅妻昭三		宇佐美裕三	64	内海公子	80	熊木節子		
	関口太郎		笠原仰二	55	今湊良敬		飯村康一		江口一弥				
	田辺一郎		川瀬熙		行形勝		鹿児島弘		菊池可寿子		通信制		
	高松利男		小林欣一		石本林三		神田悌三		斎木幸彦	8	湯浅恒太		
	中川左脩		小野芳一		逢坂修造		佐藤純一		坂井俊一	9	湯浅ヨシミ		
	中山真		唐沢浅治		片桐武昭		種岡健		信濃哲夫	1	田中栄一		
	野崎亀六		桑名昭治		真谷誠慧		小島道夫		高木睦弘		西成田さと子		
	長谷川健彦		小宮富郎		高橋輝雄		笹川一雄		笹川靖雄		太田耕一		
	樋口通		斎川正二		常木剛		島崎毅		志賀英雄	10	三鍋芳榮		
	本田浩一		須貝重孝		富所寿男		関根彰円		土屋英夫	12	庭山実		
	本間正巳		早川善寿朗		永井一郎		牧泰彦		成田幸雄	10	神保泰成		
	本間五夫		笹川重男		長谷川政彦		堀川兵一		佐藤章	11	中沢初夫		
	望月彰		斎藤素一		松浦徳雄		松本俊彦		忠昭男	12	岡村清		
	八木正		嶋岡強		和田迪雄		山宮英世		佐藤陽一	13	中山雅之		
49	相沢春吉		田中泰雄		小林一彦		吉川篤		塚本晫磨		高橋フジ子		
	伊藤光一		田中晟策		小林勝		渡辺友夫		富山哲夫		本間保史郎		
	稲泉武男		富沢光雄		斎藤雅彦		久住和磨		畑野晋也		岡村澄子		
	逢坂邦男		花沢博		佐藤正紀	60	上杉雅之		松原迪夫	12	大関正夫		
	梶原計佐		藤井一郎		砂山晃		内山真一		山根伸之	6	金子リヨ		
	神林光雄		細貝繁男		清野半吉		阿部梅太		山崎雅司				
	小林直一		山田精一郎		高橋克威		熊倉登	65	安宅厚				
	小林幸男	52	赤柴豊		野崎誠哉		奥田達也		神林純夫				
	駒林行弘		阿部秋由		長谷川直人		熊田彰		樋口宣久				
	白川保		石崎昭一		保倉修		小出直		堀川旁夫				
	田中久盛		折戸睦男		細野助栄		小林亨		小沢征夫				
	原猛		小沢興栄		窪尾益敏		小山功		尾関通郎				
	長谷川辰蔵		乙川良英		武藤輝一		斎藤卓史		神林恒通				
	弘中博八		加藤尚		山田源行		高野信之		斎藤彰				
	原田湛元		柏森喬		渡辺知一		成田禎作		藤井青				
	渡辺純		川合賢吉		土田達禅		浜田達三	66	内田定寛				
	竹山行雄		斎藤兌		中村幹男		山崎勝朗		関篤司				
	清水直彦		斎藤志郎	57	岩溯信一		本間一浩		小林啓志				
	安宅恵一		佐藤隆		内田潤		宮北勉		鈴木幸				
	石附福衛		佐藤隆三		篭島一衛		星野昇		吉田六左エ門				
	石田卓也		里見義泰		小田一彦	61	伊藤良介		渡辺正弘				
	海老名正夫		塩田欣弥		織田瑞谷		江口良助		山崎稔				
	枝村道平		坂井和夫		佐藤勇一		木村磐		片山真				
	大川正彦		佐藤秀夫		佐藤豊		太田二郎	67	石田瑞穂				
	加藤昌		鈴木昭		滝沢宇平		佐藤真武		安宅威夫				
	苅部一郎		武笠昭二		高塚勝吉		中山省太郎		安藤彰子				
	粟原昇平		高沢常夫		中川彰		近藤英雄		仲村真				
	小林正一		白井堅雄		南雲照三		菅原和明		君英夫				
	佐々木雄幹		真保禎二		高原哲雄		長谷川亨三		小林晋一				
	出塚助太郎		関口次郎		中田正男		村田俶		沢田俊一				
	今井弘		田中長勛		中山昭一		本間淑人		高倉亨				
	今井勝十郎		津野正平		巻口健一		渡部稔		星允				
	大石正信		中川義郎		目黒剛	62	石田幸夫		星野真理子				
	大津匡		永井勝郎		星野健二		石田忠郎		松井建吾				
	逢坂卓二		長沢昭二		丸山長夫		上原明		斎藤真憲				
	岡田一郎		成田昭一		大谷勝己		古谷野倭雄	68	小林和子				
	勝見秀也		丹羽昭	58	石塚昭五		中山政明		安食恒和				
	上村光司		長谷川彰		歌代荘平		原正雄		上村晃一				
	川合源治		早川泰之助		大関允良		星野睦夫		北村泰作				
	苅部洋太郎		星野昌人		大石一郎		山崎敬介		小林キヨ子				
	木原玉成		広川勲		織田正明		小林政弘		田中光弥				
	黒川恒夫		藤田礼一		清川坦		斎藤健		浜田庄司				
	轡田勝弥		本田等		木村善章		田村誠一		宮尾益征				
	熊木淳一郎		本間昭三		遠藤整治		田中良三		若林茂敬				
	小林淳郎		三井田彦二		大山芳郎		村山輝行		石本隆太郎				
	坂口忠城		皆川洋作		加藤高弘	63	阿部達		小町聡敏				
	渋谷武		宮尾益克		解良醇一		赤羽良樹		等々力章				